

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

56

2007
0828

立秋とは名ばかりの暑さが続きますが、皆様におかれましてはますますお元気で過ごしのことと存じます。さて、長らくのご無沙汰となってしまいましたが、都市史研究会のニューズレター56号をお届けいたします。

本号では2007年4月から7月までの活動の内容と今後の予定について報告いたします。具体的には4月以降に行われました例会について発表題目及び発表者から寄せられました報告要旨と、6月に行われました塚田孝氏を招いてのラウンド・テーブルの概要を掲載いたします。巻末には前号に引き続き、科研費基盤研究A「都市アイデアの生成と変容に関する研究」において行われました調査旅行の報告記事を掲載いたします。

昨年以來、月一回というペースで、時には二日連続で朝から夕方までと言ったハードスケジュールの下に行ってきた研究会例会ですが、科研費基盤研究「とらっど3」の出版企画『シリーズ伝統都市』と連動したこれまでの企画は、おかげさまで7月をもって無事終了いたしました。今後は隔月程度のペースで、これまでのような個別報告や書評会に加え、ラウンド・テーブルやシンポジウムと連動した例会活動を行っていきたいと考えています。

また近いうちに科研費基盤研究「とらっど3」及び都市史研究会のウェブサイトを開く予定です。これについては詳細が決まり次第、メールにて報告いたします。今後とも都市史研究会へのみなさまのご参加をお待ちしております。

第63回都市史研究会例会（第9回とらっど3研究会）

4月15日、東京大学出版会第一会議室において、第63回都市史研究会例会（第9回とらっど3研究会）が行われました。当日は佐藤かつら氏、伊藤裕久氏、鈴木博之氏、森下徹氏、吉田伸之氏、伊藤毅氏による報告がなされ、活発な討議が行われました。

発表題目	囃子方	佐藤かつら（鶴見大学）
発表題目	都市空間の分節把握	伊藤裕久（東京理科大学）
発表題目	産業革命と都市	鈴木博之（東京大学）
発表題目	都市民衆世界	森下徹（山口大学）
発表題目	伝統都市の分節構造 浅草：都市周縁における部分社会	吉田伸之（東京大学）
発表題目	移行期の都市アイデア	伊藤毅（東京大学）

第64回都市史研究会例会（第10回とらっと3研究会）

5月12日、13日の両日、東京大学出版会第一会議室において、第64回都市史研究会例会（第10回とらっと3研究会）が行われました。12日は宇佐見隆之氏、工藤晶人氏、杉森玲子氏、岩淵令治氏による、13日は飯島みどり氏、近藤和彦氏、山根徹也氏、野口昌夫氏による報告がなされ、長時間に及んだにも関わらず活発な討議が行われました。

発表題目	道(インフラとしての)	宇佐見隆之(滋賀大学)
発表題目	オラン—「ラテン」な植民都市の形成	工藤晶人
発表題目	売場—近世京都・六条寺内の形成	杉森玲子(東京大学)
発表題目	藩邸	岩淵令治(国立歴史民俗博物館)
発表題目	ベシンダ・バリオ・死の聖母	飯島みどり(立教大学)
発表題目	ロンドンの二つの橋:転機としての18世紀半ば	近藤和彦(東京大学)
発表題目	一八四八年革命前夜のベルリン～三つの結社に見る市民的ヘゲモニーの諸問題～	山根徹也(横浜市立大学)
発表題目	フィレンツェの都市改造1540-1574—コジモ1世とジョルジョ・ヴァザーリ	野口昌夫(東京芸術大学)

第65回都市史研究会例会（第11回とらっと3研究会）

7月2日（東京大学工学部1号館建築学科会議室）、9日（東京大学出版会第一会議室）の両日第65回都市史研究会例会（第11回とらっと3研究会）が行われました。2日は岩本馨氏、小野将氏、陣内秀信氏、9日は杉森哲也氏、高澤紀恵氏による報告がなされ、活発な討議が行われました。当日の報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨 城下町

本報告では中世から近世への移行の道を切り開いた織田信長にスポットをあて、彼の城郭構築・城下町建設行為を総合的に見ていくなかに、城下町という都市類型が形成されていく一つの過程を捉えようとした。とくにここでは、時限的で仮設的な「橋頭堡としての城」の原理と、長期的で恒久的な「本拠地としての城」の原理の相剋に留意しつつ、この時期のインフラ整備の両義性について考察した。

岩本馨（京都工芸繊維大学）

発表題目 《「国学」の都市性(part2)》へ向けて

小野将（東京大学）

報告要旨 地中海都市

都市のアイデアに関し、地中海人（支配者&一般市民）が何にこだわり、何を大切にしてきたかを考察した。まず、都市全体を示す図像がいつの時代にも存在し、都市のアイデアを具体的に示してきたのに対し、日本にはそれが無かったことを指摘した。続いて、アイデアを様々なレベルのアイデアから取り上げ、内と外の概念、公的中心の存在に触れる一方、私的な生活空間の安定や安心のための中庭や複雑系都市構造の価値を論じた。さらに、都市を楽園と見る思想、都市と農村の関係など、人間と自然の関係を考察した。

陣内秀信（法政大学）

報告要旨 都市図屏風論——安土図屏風を中心に——

報告者に与えられた課題は「都市図」である。本報告では、様々な「都市図」のうち都市図屏風を考察の対象とし、それを〈都市アイデア〉という観点から検討することを基本的な課題とする。報告ではまず都市図屏風の歴史を概観し、次いで織田信長の城下町である安土と安土城を描いた安土図屏風を取り上げた。今後は、安土城下町、安土城、安土図屏風を一体のものとして捉え、これらを〈都市アイデア〉という観点から再検討することを試みたい。

杉森哲也（放送大学）

報告要旨 近世パリの街区——清掃・権力・社会的結合

近世パリの街区は、多様な社会的結合関係が織りなされる場であると同時に、非制度的権力関係と制度的な権力が交錯する場である。個々の街区を全体へと繋ぐ制度的な権力は一つではなく、都市社団と王権がときに相補的に、ときに対抗的に街区と関わりをもつ。本報告の目的は、通りの清掃と塵芥処理のシステムから、街区と都市社会全体を繋ぐ複数の論理とその変遷を考えることにある。16世紀初頭から18世紀初頭までの2世紀のシステムの変遷からは、王権主導の空間の統治が立ち上がる軌跡が見えてくる。

高澤紀恵（国際基督教大学）

ラウンド・テーブル「都市社会史と身分的周縁——塚田孝氏に学ぶ——」

6月1日、2日の両日にわたって、東京大学文学部・法文1号館211番、115番、217番教室において塚田孝氏（大阪市立大学）を招いて、ラウンド・テーブル「都市社会史と身分的周縁——塚田孝氏に学ぶ——」が行われました。1日目の午後に塚田氏の著書・書評研究会が開かれ、吉田伸之氏によって『近世大阪の都市社会』（吉川弘文館、2006年6月）、竹ノ内雅人氏・高垣亜矢両氏によって『近世大阪の非人と身分的周縁』（部落問題研究所、2007年3月）がそれぞれ書評され、それに対する塚田氏からのコメントがなされました。二日目には塚田氏による氏の方法論に関する講義が行われ、学生を中心として多数の参加者が聴講しました。

次回以降の研究会のお知らせ

次回以降の研究会例会の日程については詳しいことはまだ決まっていません。決まり次第、メールにてお知らせいたします。また下記のシンポジウムに関しましても、詳細が決まり次第、メールにてお知らせする予定です。

都市史研究会シンポジウム

日時 2007年11月10日（土）、11日（日）

会場 東京大学工学部1号館15号教室

テーマ 現代都市類型の創出

個別報告者：鈴木真歩（東京大学）、土田宏成（神田外語大学）、初田香成（東京大学）、池田嘉郎（新潟国際情報大学）、中川理（京都工芸繊維大学）

ラウンド・テーブル話題提供者：伊藤毅（東京大学）、吉田伸之（東京大学）

ラウンド・テーブル討論者：伊藤毅（同上）、吉田伸之（同上）、鈴木博之（東京大学）、増谷英樹（獨協大学）



[工学部1号館の場所]

ヘテロフォニー都市ハノイ 中国・ベトナム視察旅行記

松本裕 (大阪産業大学)

暗闇の密度

季節外れの寒波に見舞われ、体の芯から凍てつくような中国での視察を終え、ハノイに入った。ベトナムはずいぶん暖かいと聞いて安心していたが、三月ははじめというのにかなり肌寒い。

空港から市内へ向かう途中、すでに日本企業も進出を開始しているという工業団地を通過した。必要最低限に配された街灯のほのかな明かりがあるだけで、あたりは見事な闇。やがて中国からベトナムへと工業団地建設のブームがシフトし世界の生産拠点として一気に花開くのをじっと待っている、そんな夜明け前の暗さに思えた。暗闇は何も見えない分、逆にその奥行きと潜在力を感じさせる。もしいまが戦時下だったなら、その底知れぬ恐怖にここでもまた体が凍りついていたことだろう。

あまり流暢とは言えない語りのところどころに妙にこねた日本語を挿入するアンバランスさが微笑ましい通訳ガイドの青年が、ベトナムは産業の約80%を農業が占めるまだまだ貧しい国ですと寂しげに言い放ったその切実さは、この暗闇にしみいる感じがした。

こうして静かにすべりだした初めてのベトナム旅行。わずか数日の滞在だったが、前から気になっていた二つのことを少しは肌で感じる事ができた。その一つは、「ドイモイ(Doi Moi:刷新)」政策が、複雑に揺れ動いたこの社会主義国家にもたらした方向性と現在の勢い。もう一つは、植民地として押しつけられたフランス型都市計画のベトナム流の消化具合である。

サソリとカエルとグルメとエステ

たとえば『プラトーン』(オリバー・ストーン監督、1986年)のようなベトナム戦争映画の大作よりも、サイゴンでいちばん流行っている寓話だよとって東京で一人のアメリカ人の新聞記者から開高健が聞いたという小話の方が、ベトナムに対するはるかに強烈な先入観を私に与えていた。その風刺話は次のようなサソリとカエルのやりとりだ:

ある日、一匹のサソリが川へやってきた。川をわたろうと思ったサソリは泳ぎを知らない。困ってあたりをさがしたら、草むらにカエルが一匹すわっていた。背中にのせて向う岸へわたしてくれとたのみこんだら、カエルは、あんたはおいらを刺すからイヤだよとってことわった。

「バカだな、おまえ」

サソリは笑った。

「おいらは泳げねえんだからあんたを刺すはずがないじゃないか」

人のよいカエルはそういわれて考えな

おし、なるほどそういわれたらそうかも知れないと思い、サソリをのせてやることにした。

川をわたりはじめてまんなかあたりまでいったら、とつぜんサソリがカエルをプツリと刺した。二人ともたちまちおぼれ、死んでしまった。おぼれながらカエルが水のなかから悲しげに叫んだ。

「なんだってこんなことするんだ」

サソリが水のなかから悲しげに叫んだ。

「それが東南アジアなんだよ」

(『ベトナム戦記』開高健、朝日文庫、2005、p.3より)

「北属南進」¹⁾の歴史を通じて内政は激動し、フランスをはじめとする外圧に翻弄されながら、超大国アメリカとの戦争を耐え抜き、国土と民族の分断を乗り越えて社会主義国家としての統一を成し遂げた執念の国。人々は常に争いの渦中に生き、過酷な訓練に立ち向かうことで涵養された強靱な精神力と、まさに暗闇のように計り知れない惨憺な頭脳を瘦身に併せ持っている。私が勝手に抱いていたこうしたベトナムの不気味なイメージは、サソリとカエルの理不尽な寓話とぴったりだった。

しかし、実際に見たハノイの街は活気に満ちあふれていた。「ドイモイ」政策がもたらす経済効果によるのだろうか。ベルリンの壁が崩壊した直後に旧東ベルリンを訪れたときに漂っていた街全体が茫然自失とした雰囲気はみじんも感じられなかった。北京や上海でも同様に感じた。社会主義体制自体が崩壊したわけではないので、人々は、自分が拠って立つ国家的な基盤に対する総括はとりあえず括弧に入れて、まずは改革開放路線に経済的な活路を優先的に見出す事ができたのかも知れない。

街の活気にもまして驚いたのは、人々が実に清楚で適度に明るいことだ。特に印象的だったのは、ハノイの後に訪れたフエでの昼下がりのこと、高校生達が昼食のために一時帰宅する光景だった。男子生徒の中には自宅には帰らず露店でつるんで「街食」をしている姿も見受けられたが、大部分の生徒は自転車で家路を急いでいた。そんな中で、女子生徒たちのまとうアオザイの白さが炎天下のフエで鮮やかに映えていた。決して豊かな身なりではないが、品の良さが感じられた。

立ち寄ったカフェでも、遠慮がちながほのぼのとしたサービスが心地よかった。そんな素敵なサービスがなされたのかどうかは知らないが、関西国際空港への帰国便に同乗した女性ツアー客たちは、ベトナム料理をたらふく食べてエステ三昧というおよそ相反する絶対矛盾的自己同一な思い出話に興じていた。

オスマニゼーション

植民地政策は自国権力の象徴として、都市計画や建築を他国にマーキングしていく。

「オスマニゼーション(Haussmannisation)」とは、セーヌ県知事パロン・オスマン(Baron HAUSSMANN 在任期間は1853-1870)がパリ大改造で実施したような都市計画の手

法を意味する。

パリ大改造では、主として衛生面・治安面の改善 都市景観の美化 インフラストラクチャー・公共施設整備 都市の緑化・公園建設 郊外開発・不動産投機といった目的があった。これらを最も総合的かつ効率的に達成する手段が道路開設事業であった。その結果、中世以来の込み入った街並みは切開され広い直線道路が敷設された。そして、パースペクティヴの効いた開設道路の焦点には、しばしばモニュメンタルな建築や広場が配された。

「オスマニザシオン」の象徴的なプロジェクトの一つが、シャルル・ガルニエ(1825-98)設計のパリ・オペラ座(1875)とオペラ大通り(avenue de l'Opéra)の開設である。

オペラ大通りは、1853年11月15日の政令以降、いくつかの部分に分けて開設事業が実施された。最終的には、第二帝政崩壊(1870)にともなうオスマンの失脚後に事業が引き継がれて1877-79年頃貫通した。言わば「ポスト・オスマン」期の産物である。オペラ座とオペラ大通りの完成は、万国博覧会などで華やかに彩られる「ベルエポック」期の幕開けを告げる事業であった。そして「オスマニザシオン」は、各国の諸都市や植民地に伝播し、都市建築の近代化に影響を与えていった。

ハノイ・オペラ座(ハノイ市立劇場。1911年建立、1997年修復)とその周辺整備は、まさに「オスマニザシオン」のアジア代表といえるだろう。

その外観に目を移すと、パリ・オペラ座の正面ファサードがコリント式の2列のオーダー(柱のリズム・秩序)なのに対し、ハノイ・オペラ座はイオニア式の1列のオーダーである。また、ハノイ・オペラ座は「南方を意味する黄系色」²が施され、ずいぶんトロピカルな仕上がりだ。正面の柱間はどちらも7間あり、前面に設けられた基壇とバルコニーから周囲を見下ろす構成となっている点も共通している。

とても興味深かったのは、その基壇に立って、劇場の正面に伸びる大通りを眺めた時の見え方までが似せて作られていることだ。大通りの入り口に当たる部分に注目してほしい(写真1上段)。パリでは、全く同じ形のロトンダ(円形平面をもつ建築)が両サイドに配置されているのに対して、ハノイでは向かって左側のみロトンダが建築されている。そして、その開口部のデザインもパリのものにそこはかとなく似ているが、完璧ではないところに好感が持てる。

このハノイ・オペラ座の正面からまっすぐに伸びる道は、チャンティエン(Tràng Tién)通りと呼ばれる旧街道である。土地収用によって新設されたパリのオペラ大通りとは開設の経緯が異なる。

チャンティエン通りは、もともとポール・ベール(Paul-Bert)通りと呼ばれ、フランス社交界のひのき舞台であった。道沿いの店舗からは香水や石けん、ケーキやクッキーのにおいがしていたそ

うだ³。当時、この道は、紅河(Red River)からフランス人居留地を介して城郭を結ぶ重要な都市軸の役割を担っていた。そして、ハノイ・オペラ座が建つところは、かつての城門が位置し、8月革命の蜂起があった歴史上非常に重要な場所なのである。

ハノイ・オペラ座は、単に道路のアイストップや社交の舞台を提供するにとどまらず、フランス植民地ハノイという都市のまさに焦点を自ら演ずる建築なのだろう。



(写真1 左上:ハノイ・オペラ座からチャンティエン通りを望む。右上:パリ・オペラ座からオペラ大通りを望む。 左下:チャンティエン通りからハノイ・オペラ座正面を望む。 右下:オペラ大通りからパリ・オペラ座正面を望む。 撮影:松本裕)

旧市街における道路と建築の関係性

オペラ大通りのような記念碑性とは無縁の一般街路にもパリとハノイの類似性がみられた。

「オスマニザシオン」における開設道路の大きな特徴はパロッド的な一直線状の構成でもって都市軸を形成することである。

このように道路景観を統一的に構築しようという試みは、オスマン以前からすでにパリの道路の構成原理として機能していた。それが、建築壁面線規制(alignment)⁴である。この規制を通じて少しずつ道路が拡幅され壁面線がそろえられてきた。

パリの場合、マレ地区のような古いカルティエでは、壁面線が不揃いのまま残されているところがある。今回、ハノイでも同様の事例を見ることができた(写真2)。それは、旧市街の「36通りと同業組合の地区(The <36 streets and the guilds> quarter)」と呼ばれる街区の中に位置するハンバック(Hàng Bạc)通り⁵の47番地である。そこでは、隣接する建築の壁面線よりも道路側へはみ出して、というよりも元の位置から後退せずに住居が残っていた。玄関先では、老翁が椅子に腰掛けて街をじっと眺めていた。その姿は、この住居の張り出しは絶対に削りせないぞという静かな抵抗のように見えた。

ところで、ハノイでは同業組合が通り毎に形成されていて、

「フォン(坊)」と呼ばれる近隣組織として継続してきたようだ。「36通りと同業組合の地区」という名称は、そうした通りが36本あったことの名残だという⁶。

道路沿いには、間口にかかる税金を少なく抑えるため、狭い間口ながら奥方向へは中庭を介して深く伸びていく「チューブハウス(tube house)」とよばれる町家が形成されている。細長い町家が境界壁を隔て高密度に集積される街区形成は、パリの旧市街でも基本的な構成の一つとなっている。

道路と建築との関係性において、パリでは、張り出しや高さを厳しくコントロールし統一的な道路景観の形成を重視しているのに対して、ハノイの街路空間では、商品が道にあふれ出し、建物のデザインもヴァリエーションにとみ、ところどころ突出して高層建築があるところなどが、ハノイの景観に活気を与えている一因のように感じられた。



(写真2 建築壁面線規制が未適応の建築 左：ハノイ、ハンバック通り47番地。撮影：松本裕。 右：パリ、マレ地区、ヴィエイユ・デュ・タンブル64番地付近。<Page jeunes>より転載)

都市ハノイの民族音楽

どの都市でもその成り立ちを細かく見ていくと、人間の基本的な欲求や行為はよく似かよっていて大差がないのに、形としてあらわれてくるものにはやはり決定的にどこか異なった点があるように思われる。おそらく、それが風土や文化や歴史といったものの違いなのだろう。そして、発展しようとする都市には、遅かれ早かれ、近代化や国際化の波が押し寄せ、固有な文化や歴史に基づいて形作られてきた町並みを急変させていく。その構図もまたどの都市でも同じようだ。さまざまな国の支配を受け、今また「ドイモイ」政策という改革開放路線の大きな影響下にあるハノイという都市もまた然りである。

都市のイメージや印象は音楽の成り立ちとよく似ていると思う。音楽の場合、聖歌に代表される宗教音楽のように、すべての声が単一の旋律を奏でる「モノフォニー(monophony 単旋律音楽)」から発展して、クラシック音楽のように、様々な声が主旋律とその和音というように主・副を別々に分担しながら一つの美しい構

成をなす「ホモフォニー(homophony)」に至るとされている。この「モノフォニー」と「ホモフォニー」の途中には、「ポリフォニー(polyphony 多声音楽)」が位置づけられ、ここでは、主旋律と伴奏の区別が無く、それぞれの声が個別に絡み合うとされる。

都市のイメージと重ねた場合、単一的な「モノフォニー」も、多が一のもとに秩序だって構成されて美しいメロディーを演奏する「ホモフォニー」も、どちらも「ユートピア」に他ならないだろう。すると、様々な国が関与し、多様な歴史や文化が錯綜してきたベトナムのハノイのような都市は「ポリフォニー」だと言えるのかも知れない。

しかし、ミハイル・バフチンがドストエフスキーの小説を評して「それぞれに独立して互いに解け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニー」であるとか「それぞれの世界を持った複数の対等な意識」⁷とかいった意味での「ポリフォニー」都市と位置づけるには、ベトナムはいまだ変化の途上にあり、不協和音が多すぎるように思う。むしろハノイという都市は、互いに溶け合わないあまたの声が、めいめい同じ旋律をうたいながら、一時的、偶発的にズレを生じてたまたま重なり合う「ヘテロフォニー(heterophony)」都市の方がイメージに近いと私には思えるのである。

ハノイにあふれかえるバイクのエンジン音と乱れ打たれるクラクションの喧噪は、都市の「ヘテロフォニー」を奏でるアジアの民族音楽として聞こえてくる。

[付記] 本エッセーはとらっど3における科研A「都市アイデアの生成と変容に関する空間論的研究」のメンバーで、本年3月4日から12日まで中国・ベトナムを調査した際の記録の一部です。

註)

¹ 北の中国に従属しながら、南隣国のチャンパ、カンボジアへ侵攻。小倉貞男『物語ヴェトナムの歴史 一億人国家のダイナミズム』中公新書、2006、p.148参照

² 大田省一(文)、増田彰久(写真)『建築のハノイ ベトナムに誕生したパリ』白揚社、2006、p15

³ NGUYEN VINH PHUC, NGUYEN THUA HY AND BARBARACOHEN, Hanoi. Streets of the old quarter and around Hoan Kiem Lake. The GIOI Publishers, HA NOI, 2006, p.249 .

⁴ この規制に関する最初の条文は1783年4月10日の宣言にさかのぼる。

⁵ 13世紀に建設されたハノイ最古の道。1460年 1497年に銀細工職人が居住し、現在も銀商売の店が残る。Architectural Walks in Hanoi, Tour No1. を参照

⁶ 友田博通 編『ベトナム町並み観光ガイド』岩波アクティブ新書、2003、pp8-10.

⁷ ミハイル・バフチン、望月哲男／鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫、2006、p.15.

News Letter 都市史研究 Vol. 56

2007年8月28日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）
編集担当：初田香成（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
小松（武部）愛子（東京大学大学院人文社会系研究科日本史学教室）